山本周五郎全集

第七巻

講談社

山本周五郎全集
第7巻　古今集巻之五
昭和38年10月20日　第1刷発行
定　価　480円
著　者　山本周五郎
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社　国宝社
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
電話　東京(942)1111(大代表)
振替　東京3930
© Shugoro Yamamoto 1963
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

肌匂う　三
つゆのひぬま　一七
鶴は帰りぬ　四五
末っ子　七一
屏風はたたまれた　一〇一
ちゃん　一二五
若き日の摂津守　一三九
古今集巻之五　一六五
その木戸を通って　一八九

落葉の隣り　二一三
失蝶記　二四三
おさん　二六七
地蔵　三〇三
もののけ　三三三
牛　三五六
偸盗　三八一
大納言狐　四〇八
解説　河盛好蔵　四二七

デザイン　伊藤憲治

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

肌匂う

一

沢木甲午は四人きょうだいの三男であったが、二人の兄が夭折し、姉も十二歳で死んだため、彼は九歳で一人っ子になった。

沢木家は九百五十石あまりの永代老職で、父は主計といい、母は同藩庄司氏の出で、いそといった。四人の子供のうち、三人まで早くとられたので、甲午を育てるのには、夫婦はひどく大事をとった。あまやかしたとはいわないまでも、相当わがままを許したことはたしかで、そのためだけではないだろうが、彼はすぐれた躰格と健康にめぐまれながら、敏感で、衝動的で、傷つきやすい、神経質な性格に育った。――しかしこういうことは、その後の彼の、江戸における放蕩や帰国してから遭遇した出来事とは無関係かもしれない。多くの人の中には、境遇や教育によっても、その性格を変えることのできないものがあるからだ。

甲午は十七歳の年から五年間、江戸屋敷で暮した。初めの二年は藩主の側で勤め、あとの三年は留守役に預けられた。永代老職の長男は、たいていこの経路をとるし、留守役に預けられている期間が、その人物の価値をきめる基準になるようであった。いうまでもないことだが、留守役は外交官で、他藩との交際や、商人たちとの折衝をするため、饗応に招かれたり、招宴を設けたりすることが多い。もちろん遊里にも出入りするので、つい身を誤まる者も少なくなかった。

甲午が身を誤まらずに済んだのは、国許の母と、家扶の桑川五郎兵衛と、そして預けられた留守役島田兵庫との、巧みな庇護によるものであったが、それでもなお、彼の放蕩の評を隠すことはできなかったし、もう一年も江戸にいたら、無事には済まなかったかもしれない。――父の主計の病死によって、甲午は江戸詰を解かれ、二十三歳の二月に、国許へ帰った。

帰国してから二年ちかいあいだ、彼は八方塞がりなような、気まずい、欝陶しい気分ですごした。家庭の中では、母と家扶とが、彼のために、江戸の然るべき筋へ奔走し、多額な金を遣った、ということがわかって、これが相当な負担になったし、外では外で、友人知己に限らず、極めて多くの人が彼の放蕩ぶりを知っていて、――むろん誇張され、尾鰭が付いていたが、機会のあるごとに彼をからかったり、皮肉を云ったり、くさらせたりするのであった。その中の一例をあげると、友達が五六人で、吉田大六の家に招かれたとき、岸井兵馬がいやなことを云いだした。

「沢木はもう嫁を貰うんだろうが、気をつけないといけないぞ」と兵馬が云った、「ずいぶん道楽をして女を知っているようだが、しょうばい女と生娘ではぜんぜん違うからな」

すると吉田大六が、「うん」と考え深そうに頷き、「それは忠告しておかなければならない、淀野のこともあるからな」と、語尾を濁すように云った。甲午は黙って聞いていたが、他の友人たちも代る代る、同じようなことを云いだした。要するに新婚の夜が、いかにむずかしく困難なものであるかということ。男が不注意である場合はもちろん、花嫁の躰質によっては、非常な苦痛と危険の伴なうものであること。その実例はいくらもあるし、現に自分たちも多かれ少なかれ、似たような経験をもっている、などということであった。甲午はかれらがいつもの手でからかっているのだと思ったが、そこにいる者の多くがすでに妻帯者であるのと、放蕩ちゅうにも、女たちからそんなふうな話を聞いた覚えがあるので、少しばかり不安な気分になり、それでもできるだけ平静に苦笑しながら、「淀野がどうかしたのかね」と訊き返した。

「それはよそう、淀野のことは訊くな」と大六が首を振った、「あれは例外だ、あれはあまりにひどい」

うん、あれはひどい、とみんなが云い、岸井兵馬が、ひどいけれども「それほど稀なことでもないんだ」と云った。甲午は怯んだような気持になり、それ以上は訊かなかった。

だが、すべてがそんなぐあいだというのではなく、彼に同情と好意をよせる者もいた。その一人は庄司家のちやである。彼女は甲午の母の兄の娘だ。甲午より一つ年が多く、幼ないときから親しかった。ちやには伝八という兄があり、妻そでとのあいだに子供が二人いた。庄司は母の実家だから、ずいぶん遠慮なく往き来をしたが、伝八は甲午より八歳も年長なので、彼には従姉のほうに親しみがもてたし、ちやもまた姉さまぶって、彼をあまやかしたものであった。

「噂なんか気にしなくってもいいことよ」とちやは甲午に云った、「みんなは甲さんがわる遊びをしながら、ぼろを出さなかったことを妬んでいるんでしょ、そうでなくっても、わる遊びをなすったことに間違いはないんですもの、いまさら人の噂なんか気にしたって、しようがないじゃありませんか」

それから暫く経ってのち、ちやは彼をにらんで、「甲さん、お気をつけなさい」と気をもたせるように云った。夫人や令嬢たちが、彼に興味をもち、好意をよせている、というのである。放蕩者だった、ということが、逆に好奇心を唆るらしい。そういう点では、女性たちも相当なものなので「中にはあなたを誘惑してみようかなどという人さえある」とちやは告げた。

「だから早くお嫁さんを貰っておしまいなさい」とちやは云った、「さもないと本当に誰かに誘惑されてしまってよ」

「自分こそ早く嫁にゆけばいい」と甲午はやり返した、「私は男だからいいが、貴女はもう二十四にもなるじゃないか、どうしてお嫁にゆかないんだ」

二

「ひとのことはいいの」とちやが云った、「気にいった縁がなければ、三十が四十になったってお嫁になんかゆきはしないわ」

気にいらない結婚をして、失望したり苦労したりするくらいなら、一生独身でくらすほうが気楽である、とちやは云った。

「それよりどうして甲さんはお嫁を貰わないの、ずいぶんほうぼうから縁談があるんでしょ」

甲午はあいまいに口を濁した。

友人たちから聞かされた新婚の話が、彼を臆病にしてしまったのである。かれらの話のあとで、べつの機会に淀野幸也のことを聞いたが、それは甲午の胆を冷やすに充分なものであった。要約すれば、幸也は新婚の翌日と、その翌日いっぱい、寝所の中で屏風をまわしたまま、新妻とともに、動くことができなかったというのである。そしてそのあとには、医者とか、切開とか、非常な出血などということが続き、なお、幸也自身は「不具になった」ということであった。

――それほど稀なことではない。

という、岸井兵馬の言葉と思いあわせて、甲午は（生娘との結婚に）ほとんど恐怖をさえ感じるようになった。

その年の九月、大谷新左衛門の家で、新宅びらきの祝いがあり、甲午もその祝宴に招かれた。大谷は次席家老で、招かれた客は中老以上の七家、みな妻女や娘を同伴していた。甲午のほかに村上総兵衛、木内平内、吉岡忠之進という、三人の独身者もいたが、女性のほうがはるかに多く、たいそう華やいだ宴席になった。――その席へゆくまえに、控えの間で支度を直していると、庄司のちやがあらわれた。彼女は客ではなく、頼まれて手伝いに来たのだそうだが、甲午の支度を直すのを助けながら、「娘さんたちをよくごらんなさい」と囁いた。招かれた客の中の娘たちは、みな甲午の嫁の候補者だ、というのである。甲午は信じかねたが、ちやは事実だと云い、「しっかりとよく見てお選びなさい」と囁き、やさしくにらんで、奥へ去った。

甲午はまだ信じられなかったが、席へついて酒が始まると、あるじの大谷新左衛門が、「沢木どのは長い江戸詰で疎縁になっていたから」と云って、彼を他の客たちに紹介し、客は客で、各自の家族、――特に（と思われたが）その娘たちを彼にひきあわせた。そればかりではない、やがてその娘たちは、代る代る出て、琴、鼓、小謡、仕舞などの芸を披露した。彼女たちの介添には、大谷家の嫁と、庄司のちやが当り、衣裳を直すのや、楽器の出し入れを手伝っていたが、娘が代るたびに、ちやはすばやく甲午のほうへ眼くばせをした。すると、隣りに坐っていた村上総兵衛が、「気をつけろよ沢木」と囁いた。

「田島と宮川の娘は美人で評判だが、あまり頭のいいほう

じゃないからな」
「それがどうしたというんだ」
「とぼけるなよ」と総兵衛が云った、「おれはちゃんと知ってるんだから」
甲午は酒を飲むことに専念した。
ちやの云ったことが、ほぼ事実らしいとわかると、酔ってしまうほかに手のないほど、気づまりな当惑を感じたのである。彼はいさましく飲み、娘たちを無視した。他の客たちが話しかけても、ろくさま相手にはならず、ひたすら飲むことにかかっていた。——酒には自信があったが、やがて手洗いに立ち、廊下へ出ると、ふらふらするほど酔っているのに気がついた。久しくそんな飲みかたをしなかったので、それだけ軀にこたえたのであろう。暗い廊下に紛れこんで、手洗い場がわからなくなり、大きな声で人を呼んだ。すると、下女とみえる娘が来て、忍び笑いをしながら彼を案内し、「こちらは内で使うのだが」と断わりを云った。
「結構だ」と彼は頷いた、「そんな区別をしていられる場合じゃないんだから」
彼は手洗い場で、独り言を呟いたり、唄をうたったりした。
さっぱりした気分になって、見当をつけておいた廊下を、戻って来ると、途中の暗がりに蹲んでいる者があった。近よっていって、「どうしました」と訊くと、苦しそうな喘ぎと、かなりつよい香料の匂いが感じられた。甲午は「お酔いになったんですか」と覗き、相手はもっと苦しげに喘いで、彼のほうへ凭れかかった。客の中の婦人であろう、甲午はすぐ脇に小座敷のあるのを見て、「少し横になって休まれるがいいでしょう」と云い、婦人をたすけ起して、その小座敷へ入れてやった。
「ここで横になっていて下さい」と彼が云った、「いま誰か来るように云います」
そして立とうとすると、女は甲午にしがみついて来た。突然であり、意外に強い力で、甲午は思わず膝をついた。女は彼を抱き緊めながら、片手で自分の帯をぐっと押し下げ、甲午の手を取って、乱暴に、自分の胸へひき入れた。押し下げるとき、帯がきゅっと鳴り、衿のひろがった胸元から、香料とも肌の香ともわからない、刺戟的な匂いがつよく匂った。甲午は眼が昏んだ。吸いつくように軟らかく、ひんやりと温かい乳房の、まるみと重みとが、掌から全身に伝わって、感覚を痺れさせ、燃え立たせた。抑制心も、意識さえも熔けてしまい、女が「閉めて」と囁くのを聞いたが、障子を閉めたのも、それからの動作も夢中のようであった。すべてが現実のようではなく、火のような感覚と、反射神経だけが彼を支配し、彼は殆んど失神した。
苦痛を抑えかねたような痙攣のなかで、「あなたが好き」だという意味のことを、女は囁いた。その声は喉の奥でかすれ、聞きとるのが困難なほど、わなわなとふるえた。そ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

してさらに、「まえからあなたが好きであった」というように囁いたが、その声はもっと乱れていて、殆んど言葉をなさなかった。彼は女の肌の、蒸れるような熱さと、あまい刺戟的な匂いのなかで、もういちど失神した。

三

甲午は庭に立っていた。

女の「もういらしって」という、かすれた囁きが、耳に灼きついていた。「あちらへいらしって、――」彼はその小座敷からぬけだし、袴の紐をしめ直しながら、廊下をまわって庭へおりた。こんどは迷わずに廊下を戻ることができたし、履物もすぐにみつかった。祝宴は賑やかに続いており、その座敷の燈で、庭はかなり明るかった。

――たいへんなことをした。

甲午はにがい悔恨と罪悪感にとらわれ、うろたえた。とりとめのない考えのなかに、自分を見失いながら、惘然と立ちつくしていた。誰だろう、どの娘だろう、いや、娘ではないかもしれない。娘ならあんなふうにはできない筈だ。すると誰かの夫人だろうか、人の妻女だとすると、どうなる。彼は長い吐息をし「どうなるだろう」と口の中で呟いた。向うに夕顔が咲いていて、ぼうと白く、幻のように浮いて見えた。彼はそれがなんの花とも思わず、ぼんやりと見まもったまま、同じことを、繰り返し考え続けていた。

「そこにいるのは沢木か」とやがて廊下から村上総兵衛の呼ぶのが聞えた、「なにをしているんだ、酔ったのか」

「ああ」と甲午が答えた、「いまゆくよ」

彼はおずおずと振向いた。

席へ戻ったが、彼は眼をあげることができなかった。そこにいる客たちの中に、いまの女がいるのである。女は「まえからあなたが好きであった」と云った。女のほうでは彼を知っていたのだ。いまも彼のほうを見ているかもしれない。おそらく、その席から、彼のほうを見ているにちがいない。甲午は群衆の前で裸にされるような、恥かしさと屈辱を感じ、すぐにもそこから逃げだしたくなった。

――誰だろう、誰だったろう

彼はおちつかない不安な日をすごした。

祝宴の日から、二日、三日と経っうちに、不安はうすらぐどころか、反対に強くなるばかりであった。娘なら、嫁に貰えばいい。好ましくあろうとなかろうと、嫁に貰えばあやまちの償ないはできる。しかし娘ではなかったようだ。自分で帯を押しさげ、彼の手を取って胸へひきいれ、そうして、大胆に抱きついて来た態度は、どうしても娘のようではなかった。すると、――すると、どうなる、彼女はどうするだろう。たとえ酔っていたにしても、あれほどひたむきな情熱を持っているとすると、いちど限りで済むとは思えない。彼は江戸における放蕩の経験で、女がそういう情熱を持った場合、いちど限りでは済まない、という

ことを知っていた。
「誰だかわかればいいんだ」と甲午は呟いた、「相手さえわかれば、なんとか手を打つことができるんだ」
彼は女がなにかいって来ると思った。
母のいそ女は、大谷家の招宴の意味を知っていたのだろう、「誰か気にいった人がいたか」と訊き、「もういいかげんに嫁をきめなければいけない」とせきたてた。甲午は思案に余って、庄司のちやを訪ねた。ほかのことならともかく、こういう秘めごとをうちあけるにはちやのほかになかったからである。——ちやは甲午をあいそよく迎え、「誰かいい方をみつけて」と微笑した。それどころではない、「じつはとんでもないことになったのだ」と甲午は答えた。どうしたの、なにがとんでもないことなの。なにがって、それが、と甲午は口ごもり、自分でもそれとわかるほど、赤くなった。
「赤くなったりして、いやな甲さん」とちやはにらんだ、「さっさとお話しなさいな、どうしたというの」
甲午は思いきって話しだした。すると、終りまで聞かずに、ちやは「まあいやらしい」と両手で耳を塞いだ。
「まあいやらしい、いやらしい甲さん」ちやは憤然とした口ぶりで云った、「そんな話、聞きたくもないわ、聞いているほうで恥かしいわ、よしてちょうだい」
甲午はあやまった。ちやの口ぶりがあまり激しく、容赦しない調子だったので、彼はすっかり狼狽し、そのまま立って帰ろうとした。するとちやが「お坐りなさい」と呼びとめた。
「いいからお坐りなさい」とちやがいった。彼女の眼にはもう赦免の色があった、「しようのない人ね、しようのない人よ、甲さんは」とちやは云った、「それでいったい、どうなさろうというの」
「どうしたらいいか」と彼は口ごもった、「母には嫁をきめろとせめられるし、嫁を貰うにはそのほうを解決しなければならないしね」
「なぜ解決しなければならないの」
「だって、その人が黙っているかどうかわからないもの」と彼が云った、「嫁を貰ってから、その人があの晩のことを云いだしでもしたら、みんなに迷惑をかけることになるからな」
「いいきみだわ」とちやは彼をにらんだ、「その心配は充分にあってよ、まえから好きだったなんて云ったとすれば、これからも逢おうとして、きっかけを覗っているにちがいないことよ、いいきみだわ」
「わかったよ」と甲午はがまんをきらした、「そのほかに云ってくれることがないのなら、私はもう帰るよ」
「云うことはあってよ」とちやは初めて坐り直した、「まじめに相談をしましょう、あの晩はあたしもお手伝いにいっていたから、ことによると見当がつくかもしれないわ、あなた、その人に、なにか特徴があったら、思いだしてご

らんなさい」

甲午は思いだそうとした。暗い庭の向うに白く、ぼんやりと夕顔の花が咲いていた。だがあれはあとのことだ、女とは関係がない。あの小座敷を出たあとだ。ちやは彼の顔を見まもり、甲午は首を傾げた。

「特徴といえるかどうかわからないが」とやがて彼が云った、「かなり強く、からだが匂っていたのを覚えている」

四

「肌の匂いなの、それとも香料なの」

「わからない、どっちともわからないが、かなり強く匂ったことはたしかだ」

ちやは溜息をつき、「こころぼそいのね」と呟いた。それから暫く、なにか思案していたが、「そうね」といって甲午を見た。

「こうなさいな」とちやは云った、「あのとき集まった客の家を順に訪ねてみるの、そうすればわかるかもしれないわ」

「どうしてわかる、——」

「その人の家へゆけば、きっとその人が出て来るわ、そしてなにか眼顔で知らせるかもしれないし、さもなければその匂いでわかるかもしれないでしょ」

それがいちばん早い、そのほかに手だてはない。そしてその人がわかったら、改めて相談することにしよう、とちやが云った。甲午は考えていて、ようやく頷いた。

「うん」と彼は云った、「ためしてみよう」

彼は云われたとおりにした。

その人とはっきりわかることも、おそろしいような気持だったが、わからないままで、絶えず不安になやまされるよりもいい、と思ったからである。しかし結果は徒労だった。どの家でも彼は歓迎され、鄭重にもてなされた。いつかちやは、——女性たちが彼に興味をもち、好意をよせている、と云ったが、訪ねた家では主人よりも、妻女や娘たちのほうが、おもに彼の接待をした。もちろん、甲午は永代老職の若い当主であり、これから嫁を選ぶという立場だから、好奇心だけの歓待である筈はない。むしろもっと現実的な意味をもっていたであろうが、それらの女性たちからは、これとおぼしい人はみつからなかった。疑えば、疑える人もいたし、香料なども似たように、感じられるものがあった。立ち居のとき、ほのかに香って来る匂いは、どれも似ているようであり、またどれも違うようであった。

「もうしようがないわ」とちやは報告を聞いて云った、「度胸を据えてお嫁さんを貰いなさい、なにか云って来たとしても、そのときはそのときでどうにかなるわよ」

「そうはいかないよ」

「男は度胸よ、当って砕けなさい」

「そうはいかないよ」と彼は首を振った、「嫁に来る人を傷つけるわけにはいかないからね、もう少しようすをみる

ことにするよ」
そうして、彼は待った。
甲午にとって、その年の冬ほど寒さがきびしく、北風の吹き続いたためしはないように思えた。彼は家の中にひきこもって、興もなく本を読んだり、字を書いたりしながら、いつ投げられるかもしれない飛礫を待って、ときに度胸を据え、多くは不安な、おちつかない日日をおくった。
年があけて、三月になった或日、――甲午は一通の（署名のない）手紙を受取った。ふしぎなことに、彼はその封書を手にしたとき、おそろしさよりも一種の安堵と、よろこばしいような感情に浸された。それは、待っていた恋文を受取ったときの感じに似ていた。
「ようやく幕か」と彼は呟いた、「これでようやく幕になるわけか」
甲午は封を切った。
その手紙は短かいものであった。「わたくしはあなたが好きだったが、あなたにはわたくしがわからないようだ、あの一夜の契りは夢だったと諦めよう、わたくしのことは気になさらずに、いい方があったら結婚してもらいたい、あなたが独身でいると、却ってみれんが残るから、――」という意味のことが、明らかに手蹟を紛らわして書いてあった。
「誰だろう」と甲午は呟いた、「これだけでは誰だかわからない、娘だろうか、それとも人の妻だろうか」
手紙は外から門内へ投げ込んであったという。使いの者でも持って来たのならべつだが、これではその主の捜しようがなかった。――甲午は手紙を持って庄司へいった。ちやはその手紙を読むと、「手が変えてあるわね」と云った。
「いいじゃないの、諦らめるって書いて来たんですもの」
とちやが云った、「これで大丈夫よ、いいからお嫁さんを貰いなさいな」
「しかし、誰だかわからないとなるとね」
「そんなこと忘れなさい、自分のことは気にするなって書いてあるじゃないの、これでも安心ができないとすると、甲さんは男とはいえなくってよ」
「ひとのことならなんとでも云えるさ」
「いくじなしね」とちやは彼をにらんだ、「女ひとりぐらいがそんなに怖いんですか、江戸でさんざん遊んで来たくせに、いまさらそんな殊勝なことが云えた義理ではないでしょ、しっかりしなさい」
そうして、手紙を甲午に返した。
甲午はその六月に結婚した。相手は梶井藤右衛門の二女で、年は十八歳、名は小雪といった。梶井は三百石あまりの物頭で、もちろん大谷家の祝宴に招かれはしなかった。あのとき招待された客の中からは、どうしても嫁を選ぶ気になれなかったのである。――なかだちをしたのは中老の瀬川市郎兵衛で、仲人役は大谷新左衛門が買って出た。祝言にはむろん庄司の家族も来、ちやは甲午の支度をたすけ

ながら、「よかったわね、おめでとう」と浮き浮きしたようすで云った。
「あの人ならきっといいお嫁さんになるわ、甲さんもいい旦那さまにならなければだめよ」
「それが問題さ」
「甲さん」とちやが白い眼をした。
「いや違うんだ」と甲午は顔をそむけた、「それとは違うんだ、しかしわかった、なるべくいい良人になるようにするよ」
ちやはけげんそうに彼をみつめ、甲午はそら咳をしながら、袴の前をぐいと直した。——祝言は無事に終り、新婚の夜はなにごともなく明けた。

五

祝言の日から三日めに、甲午はごく親しい友人たちだけ六人を招き、妻の紹介を兼ねて、小酒宴をひらいた。——かれらのほうでは忘れていたらしい、かなり酒がまわったころ、妻が座をはずしたときを覗って、甲午はまず岸井兵馬に「なにか云うことはないか」と訊いた。
「なにかって」と兵馬は訝しそうな眼をした、「祝いはもう述べたぞ」
「そっちはどうだ」と甲午は吉田大六を見、他の友人たちを見た、「おれは新婚三日めだ、なにか云うことはないのか」
みんな黙った。甲午がまじめな顔をしているので、かれらはなにごとかと思い、互いに眼を見交わした。
「忘れたんだな、こいつら」と甲午はかれらに云った、「ひどいやつらだ、おれはしんけんに心配したんだぞ」
かれらにはまだわからなかった。
「岸井が初めに云ったんだ、思いだしてみろ岸井、思いだしてみろ」と甲午が云った、「おれが江戸から帰ってまもなくのころだ、吉田の家でみんなが集ったとき、岸井が先立ちになっておれを威したことがあるだろう」
岸井兵馬が「あ」という眼をした。
「そうか」と大六が微笑した、「わかった、思いだしたよ」
「あやまれ」と甲午が云った、「おれはしんけんに聞き、本気で心配した、本当だぞ、おれは結婚というものに恐怖さえ感じた、こんどの祝言の夜も、じつを云うと逃げだしたくなったくらいなんだ」
岸井兵馬が、「だってわれわれは友情から」と云いかけ、甲午が、「たくさんだ」と遮った。
「云いわけはたくさんだ、あやまれ」と甲午は云った、「新婚の夜は無事に済んだ、なにごともなかった、なにごともだ、困難といったっておどろくほどのものじゃなかった、それをきさまたちは、——いいからあやまれ、なんでもなかったぞ」
「いやどうも」と吉田大六が頭を下げた、「そいつはどうも、失礼」そしてみんなが声をあげて笑いだした。

結婚生活は平穏に過ぎていった。甲午は七月に「年寄役」に任じ、納戸方取締を兼ねることになった。妻の小雪は、明るいはきはきした性分で、母の気にもいったし、親族の評判もよく、甲午にとっても不足はなかった。――中一年おいて長男が生れ、仲人役の大谷新左衛門が名付け親になって、鶴之助と名付けた。

鶴之助が生れた明くる年、庄司のちやが結婚した。相手は国許祐筆の森島斉宮というのだが、斉宮は若いときから固疾があって、弟の大学に家督を譲り、一年の大半は寝ている、という状態であった。――甲午はそういうことは知らなかった。ちょっと役所の事務が多忙なときで、話は聞いたかもしれないが、うわのそらだったろう。ちやが訪ねて来たときも、「三十白歯などといわれずに済みましたね」とからかったものであった。なにかやり返すだろうと思ったが、そのときちやは淋しげに「そうなのよ」と微笑し、「これがきっと割れ鍋にとじ蓋っていうんでしょ」と云った。

事情を聞いたのは、その年の秋のことであった。秋といっても八月初旬の、まだ残暑のきびしいときであった。到来物の梨があり、あまりにみごとだったので、森島へ少し届けさせた。その日は午後にひどい夕立があって、甲午が下城したときは、小雪もちょうど森島から帰ったところだった。

「途中で夕立にあったものですから、ちやさまのお召物を拝借してまいりましたの」

小雪はそう云って、借りて来たという、その単衣をたたんでいた。薄い藤色の地に萩を染めた、絽の単衣だったが、――たたみながら、小雪はそれを二度ばかり鼻に当てた。

「ちやさまお気の毒ね」と小雪が云った、「森島さまは寝たっきりで、このさきも丈夫におなりなさるかどうか、医者にもわからないんですって」

「森島が」と彼は妻を見た、「いつからだ」

「初めからですって、ちやさまはそれを承知でいらしったんですってよ」と小雪が云った、「あんなにお縹緻よしだし、ほかにいい御縁もあったでしょうのに、御夫婦とは名ばかりでお子を産むこともできず、一生ただ御病人の看護をして暮すようなお家へ、どうしていらっしゃる気におなりなすったのでしょう」

そのとき甲午の頭の中でなにかが起った。音のような、光りのようななにかが、頭の中でくるくると、渦を巻きだすように感じた。

「やっぱりこれだわ」と小雪はまた、たたんだ単衣を鼻に当て、「なにかしらと思ったら」と独り言を云った、「やっぱりこのお召に付いた匂いだったのね」

「どうしたんだ」と甲午が訊いた。

「このお召物が匂いますの」と小雪は立ちあがった、「お香の匂いでもないし、なにが匂うのかと思ったんですの」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo